

第9回

INTERIOR

-One Piece-

The Philippe

PHOTOGRAPHER MIKI TAKASHIMA

マンハッタンから車で北に約2時間、ニューヨーク州とコネチカット州のボーダー近くの町シャーロンに暮らす、ペインターであり、スカルプターでもあるジョンポール・フィリップを訪ねた。「アートワーク、自分を取り巻く環境、その他すべてのものはつながっている。僕は自身自身や自分のアート作品と常に共鳴し合っている」と自身が創る世界がそのままキャンバスの外に飛び出してきたようなスペースで暮らし、制作をする。

もともと鳥の観察のために利用されていた土地 (Bird Sanctuary) の一角で緑が豊か。敷地の手前にキャビン、奥にバーンがある。キャビンにはキッチンとバスルームが備わっており、バーンは基本的には制作のスペースになっているが、用途は常にその時に応じて変わるという。「僕は日本人のように、必要なものを必要な時に必要な場所に配置させて使う」。2匹の猫と共に生活をし、アーティストも頻繁に出入りする。

キャビンは常にアートレジデンシーにオープンであり、日本文化から多くのインスピレーションを受けるという彼は、とくに日本人のクラフトマンを優先的に受け入れているとのこと。この土地を受け渡された当初は、リトリートハウスとしてただ静かに時間を過ごすためにマンハッタンから通っていたが、2016年からフルタイムで生活を始めてからは、気を散らすものが周りになくなっただけで、制作に集中できるようになり、都市にいた頃よりも忙しい日々を送っているという。作品制作、ガーデニング、家、動物……仕事はたくさんあつて、常にそれぞれにバランス良く注意を払う必要があるとのこと。早朝と夕方の陰影が美しい時間帯 (レイキングライト (Raking Light) と説明する) には外で仕事をし、太陽がすべてをフラットに見せる時間帯は視覚的に面白くないので、室内で制作をすることが多いという。自然や体験から、制作のためのインスピレーションを多く受ける彼は、火鉢やグリルなどで外で調理し、蚊除けを張り外で寝ると言うような日々を送ることも多々あり、敷地をまるでインテリアの延長のように使い生活する。

高島未季



バーンの1階、主に制作のスペースとして使われる部屋。台の奥には質素なベッドが、ここで寝ることも

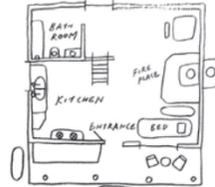


バーンの1階



バーン1階平面図

バーンロフト平面図



キャビン1階平面図

キャビンロフト平面図

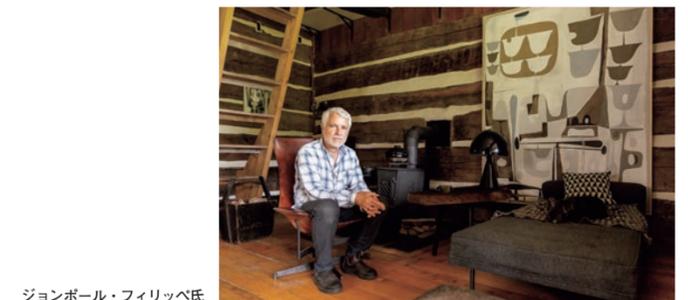


102頁～103頁写真／キッチンからキャビン内を眺める。有機的、無機的な要素が良いバランスで混じりあい面白い。左手は「あるべき場所にあるべき物がなければいけない」と、ショーウィンドウのように物が美しく配置されているキッチン。彼のインスピレーションの源となっている日本やアジアの物が多く見られる。壁に掛かっているのは新作のペインティング。ホワイトポर्टランドセメント、砂、石灰でつくられたチンキングがインテリアをユニークにしている
上写真／クリーニング用の洗剤など、彼から見て美しくないデザインのものを入れ替えて使ったり、良いデザインの箱に入れたり、カバーをかけたたりして保管する。家の中にあるものはニュートラルで、緑、青など、中から見える色はすべて外からのもの



右上写真／バーン2階。ジョンボールの制作スペース。窓の枠が視覚的にうるさいということで、3列に並んでいる窓を大きな一つの窓に取り替える計画を立てている。目に入るものはアート制作に影響するので、空間がシンプル、ニュートラルであることは彼にとって重要であるとのこと
右下写真／バーンの階段には、自身のアート作品と本棚が。デザインが見えないよう本が保管されている
左上写真点／キャビンのポーチ。「ただ家の中に十分なスペースがないためにそうしているだけだけど、ヘルペリーのように冷蔵庫を外に配置している（入口のドアの左にある木箱）。冬は電源を切ってナチュラル冷蔵庫に
左下写真／敷地を入って行くとまず目にする風景。手前にキャビン、奥にバーン。それをつないでいるのは北斎の作品にインスパイアされたというダグラスファアの板で造られた通路

右写真／キャビンのロフトはゲストルーム。普段は猫のクラウド（Cloudy）のスペースになっている。衝立でなんとなく仕切る感じが日本的
下写真／バスルーム。カーテンレールが藁でできている



ジョンボール・フィリップ氏